

## 小川正恭さんの思い出

My memories of Ogawa-san

白水 繁彦\*

Shigehiko SHIRAMIZU\*

### 1. ユーモアと仄かな含羞と

『不実な美女か貞淑な醜女か』

『魔女の1 ダース』

『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』

『ロシアは今日も荒れ模様』

『ガセネッタ, シモネッタ』

『ヒトのオスは飼わないの?』

研究室の私の書棚に定年退職まで鎮座していた本である。著者はロシア語通訳者の米原万里(1950 - 2006)。全て小川さんからもらったものだ。ほかにも、『世界の日本人ジョーク集』をはじめとする早坂隆の著作、それに新刊の小説や新書版なども頂戴した。微かな皮肉や、ちょっとニヤリとしてしまうような表現がちりばめられているものが多かった。「趣味」としての読書も大いに楽しんだ小川さんは、ご自分が読み終わった本を、「この本もお好きかもしれません。読了後は返却に及びません」と、例によって、頬に含羞を浮かべながら渡してくれた。おっとりした話し方に加え、小川さんは6歳年少の私にも終始丁寧語を遣われた。私は長い付き合いの中で小川さんがひとの悪口をいうのを聞いたことがない。「正恭」、小川さんにかんしてはまさに「名は体を表す」の譬えどおりの人柄であった。

---

\*武蔵大学名誉教授

いっぽう私は生来の直情径行。「小川さんでなければこんなに長くつきあってくれないね」とは両方を知る友人の評だが、まことに、的を射ているといわざるを得ない。

私は社会学でもメディア社会学やエスニック・アイデンティティといった周縁的なテーマを扱ってきた。したがって、親族論などを深める正統派の社会人類学者である小川さんの研究について云々することはできないし、もとより本誌の編集者もそれを期待してはいないはずだ。“ふたりはやけに親しいし、どうも長い付き合いらしい。小川先生の人間的側面を語らせてみよう・・・”そんな感じの執筆依頼意図ではないかと私は勝手に推察して書き始めている。

読み物の趣味だけでなく、そのユーモアも好きだった。

「今朝、向こうからお年寄りが歩いてくるな、と思っていたらショーウィンドウに映った自分でした」。これは小川さんが還暦を少し過ぎたころの述懐。そういえばそのころ、小川さん、ちょっと猫背になり始めていた。

大学からの帰路は新江古田から新宿まで一緒した。同じ神奈川県でも小川さんは茅ヶ崎、私は当時、京急線金沢文庫の近くに住んでいた。いずれにしても遠距離通勤。夕方、教授会の後などは少し燃料を入れてから帰りたい。「どうですか、新宿で軽く一杯」。私も好きなほうである。「いいですね。行きましょう」。行きつけの店は新宿駅K百貨店の8階。小川さんの一杯はたいていが抹茶クリームあんみつ、時に田舎しるこ塩布付き。私は白玉あんみつ。大勢のご婦人のなかに男性はわれわれ二人だけ、という回も少なくなかった。

新宿駅を利用する小川さんはかねてからこの甘味処に目星をつけていたらしい。最初にこの店に入った時のこと。「白水さんと一緒だと心強いです」と言われた。たしかに、社会によって男性が入りにくい店、女性が入りにくい店に違いがある。文化論的になかなか興味深い。甘党の私がかねがね

不思議だな、と思っていたこともあって、男性が入らない店、女性が入らない店についてお互いに国内、国外での体験を披露しあった。そして話はいつしかジェンダー論になり、ついには女性教員の数を増やすにはどうしたらいいだろう、といったことにまで及んだ。私はこの時のこの時間がまことに心地よかった。なにより私は小川さんと食の好みだけでなく価値観が似ていることが嬉しかった。落ちついた静かな店内もよかった。小川さんもそう感じたのであろう。以後、行きつけの店になった。

## 2. 野口研究室での出会い

私が「オガワさん」と気楽に呼ぶのは、出会いが共に20代だったから、ということもある。私は1960年代後半から1970年代終わりまで、成城大学で過ごした。学部ではマスコミュニケーションや社会心理学を専攻していたが、70年に入った大学院は常民文化専攻といって、民俗学を柱として周辺に人類学や社会学、文化史の科目を配したつくりになっていた。いきおい、民俗学や人類学を専門とする教授や院生から大きな刺激を受けることになった。友人や若い教授に勧められて出入りするようになったのが野口武徳研究室である。私はご本人の前では「野口先生」と呼んだが、仲間内では、親しみを込めて「ノグチさん」と呼んだ。

若いうえに、飾り気のない野口さんはとにかく学生や院生に人気があった。この野口さんが「都立」（都立大学）の社会人類学の出身だったのだ。彼はよほど都立を愛していたのであろう。都立の人類学の「正史」「裏面史！」を微に入り細に入り語ってくれた。

その野口研究室には夕方になると成城の院生はもちろん、都立や教育大（東京教育大：のちの筑波大学）、東大の院生や若い先生たちが屯していた。彼ら・彼女ら（かれら）は野口さんが用意してくれているウイスキーを飲みながら侃々諤々の議論を展開するのである。私が小川さんと出会ったのはこの梁山泊状態の野口研究室であった。小川さんも当時都立の院生

であった。議論好きの連中のなかで、小川さんは、その静かで控えめな感じで独自のポジションを築いていた。あまり口を開かないが、たまに、それも遠慮がちに、意見を述べるとそれがとてもポイントを衝いていて、私には心惹かれるところがあった。そして、酒豪ばかりの都立にあって酒が苦手という点も、下戸の私には好ましく映った。ただ、冗談好きの私とはちょっと違うタイプのように感じてしまい、距離を取りながら接していた。

そのころ人類学は今とは違い、日本ではマイナーな存在だった。私は院生のころ、昭和ヒトケタの若き教師たちが呑み会で熱く語っているのを聞いたことがある。「いまに人類学を日本のメジャーな学問として認めさせるぞ」「まずは全国の大学の教養科目のひとつとして(社会学のように)人類学を置かせよう」。まことに熱い時代だった。

これらヒトケタ世代の若い教師たちが自分たちの院生・学生を引連れて岡正雄杯なる野球の定期戦をやった。「人類学メジャー化戦略」の一環だったかもしれない。そんなことはおかまいなしに、球技が大好きな私は野口さんに誘われるまま成城の選手のひとりとして出場した。定期戦は70年代中頃に始まり、「意外に」長く続いたようだ(少なくとも2016年までは行われた由)。参加した大学は人類学や民俗学の専攻のあった東大、都立、教育大、成城、ICU、一橋などが私の記憶にあるが、のちに立教や駒澤、慶應、神奈川、明治なども参加したという。ともあれ、小川さんは都立の選手として出場していた。都立の院生の渡辺欣雄さんもいた(私と同世代で、のちに武蔵大学に就職)。都立の選手の中で目立っていたのは私と同世代のSさんで、投打に活躍していた。引率の先生ながら選手として出場、大活躍していたのは一橋のNさん。それを同世代の野口さんが羨ましそうに眺めていたのを思い出す。

当時「都立」といえば社会人類学の最高峰で、岡正雄や古野清人、馬淵東一などの大先生がいて、その弟子筋の山口昌男や村武精一、蒲生正男、佐々木宏幹、青柳清孝、野口武徳、松園万亀雄といった人たちが出入りしていた。その多くがいわゆる昭和ヒトケタ生まれで、当時30代から40代

という若き研究者であった。いずれも個性的というか桁外れというか、逸話の多い人たちであった。

桁外れといえば、Aさんなどはその人後に落ちない。私が成城のマスコミ研究室の助手になりたてのころだから1970年代半ばである。野口さんたちと天竜川上流の村々の霜月祭を見学に行ったことがある。霜月祭は夜を徹して行われる。有名な祭だからフィールドワークに訪れる人類学者や民俗学者も少なくない。ある集落の祭りで、大きな声で酒を飲んでいる人がいた。「あれAさんではないですか」と野口さん。「おお、野口か。君も来てたのか」。Aさんはすっかり出来上がっていた。しばらくして彼はすつくと立ちあがり、壇上のお囃子の集団の中に入っていった、と思ったら、一人から笛を横取りすると、ピーヒャラ、ピーヒャラと吹き始めたではないか。懸命にフィールドノートに演奏時間などをメモしていたK大の宗教民俗学の一団などあっけにと取られていた。しばらくして、われわれのもとへ戻ってきたAさん曰く「祭りは楽しむべきものだ」。

小川さんは、こうした個性的で桁外れの先輩たちのなかで過ごしていたのである。後に彼は私に、「この人たちを見ていると、自分の性格、体質ではこの学問で大成できないだろうとの思いばかりが強くなりました。」と述懐したことがある。たしかに小川さんはあまり飲まないし、人類学の知識は広範だし、どちらかというと言書派の印象を与える人だった。ところが、実際には、沖縄本島北部の調査を皮切りに、台湾山岳民、フィジー、ニュージーランド、オーストラリアなど様々な地域の調査を成し遂げている。また彼は70年代から住んでいる茅ヶ崎の歴史や文化の調査を晩年まで続けていた。フィールドワーカーとしての側面も持っているのである。理論と現地との生活との往復を楽しんだ小川さん。「フィールドに行くと文章で知り得たことがより深く理解できるような気がします」と控えめに語っていた。

私は1970年代後半から80年代前半にかけて、野口さんの紹介で国内外

の調査隊に加えてもらった。その過程で、多くの都立の人たちと出会った。いずれも練達のフィールドワーカーであった。彼らからは質的調査の技法から調査対象者との交際の作法まで、様々なことを学んだ。そうして知り合った都立の重鎮や若手が次々と武蔵大学人文学部社会学科に就職していった。まず、宗教人類学の泰斗古野清人。その後、松園万亀雄、小川正恭、渡邊欣雄と続いた。当時の私は、このような鋭才が行く武蔵大学社会学科を羨望の眼差しで見つめていた。

### 3. 再会、そして同僚に

その後、小川さんとは縁遠くなった。私が成城の助手の途中でアメリカに行ったりしていたせいもあるが、なんといっても野口さんが急逝したことが大きい。野口さんが私にとって都立人脈のハブ的存在だったのだ。

ところが、80年代末、あの武蔵大学社会学科でスタッフを募集しているという情報もたらされた。文化社会学の分野を求めているらしい。武蔵の社会学科に憧れていた私は、ダメモト、で応募したのだが、なんと採用されてしまった。1990年のことである。これには自分でも驚いた。幸運としか言いようがない。おそらく小川さんあたりが頑張ってくれたはずだが、もちろん、小川さんは「みんなで公正に判断したのです」としか言われなかった。

武蔵に採用されたのはいいが、私にとって知り合いといえば小川さんしかいない。いきおい、小川さんと居ることが多くなった。小川さんの人柄については真面目である、ということは以前から知っていたが、付き合ってみるとユーモアもある。そして頭脳が緻密にできているから面倒な文書を作成しても遺漏というものが無い。学務全般に通暁している。さらに、人事はおしなべて厳正。こうしたことに気付いていた同僚は少なくなかったようで、学部にかんする大仕事のときはきまって小川さんをお願いした。1990年代初頭、まだ社会学科が人文学部で最弱小と言われていたころ、

小川さんを学部長に推すべく運動を開始した。われわれの熱意もさることながら他の学科の人たちも小川さんの人柄や能力については熟知していたからであろう、1993年、社会学科の教員として初の人文学部長に選出された。その後われわれの期待はさらに高まり、1995年の大学院人文科学研究科への社会学専攻の設置はむろんのこと、1998年の社会学部開設の際も全面的に小川さんの能力に頼った。このような度重なる難題にも彼はその瘦身を削って期待に応えた。こうして小川さんは、人文学部長のあと、社会学部の学部長も務めることになった。二つの学部で学部長というのは、武蔵大学70余年の歴史の中でも珍しい記録に違いない。

私は彼の経験・能力・見識・人柄から、次は学長に、との期待を抱いた。しかし、そのことを仄めかすたびに、「私はそのような器ではありません」、と一言で片づけられた。もっとも、彼が学長という激戦に就いていたなら、甘味処で一杯、というような悠長なひと時は得にくかったかもしれない。

小川さんとは定年退職後も時折会っていたが、いつの頃からか、誘いに応じなくなった。そして過日、その訃報に接した。奥様のお話によれば、長いあいだ具合が悪かったようだ。私とはかなり無理をして会ってくれていたらしい。

私は今も、新しい本を読むたびに、この部分、小川さんならどう評するだろう。このくだりはおもしろがるだろうな、などと夢想している自分に気付く。

最近とみに思い出すのが小川さんと語り合った「都立」の個性的な面々の逸話である（小川さんは私の知らない野口さんの一面も明かしてくれた）。その時々楽しい会話を反芻するたびに私の胸の奥が熱くなる。

小川さんの肉体は減んだかもしれないが、小川さんは私のなかで確実に生きている。